



紅木堂壽梓

南化姿見



大多常閱  
麗々亭柳橋著  
守川周重画

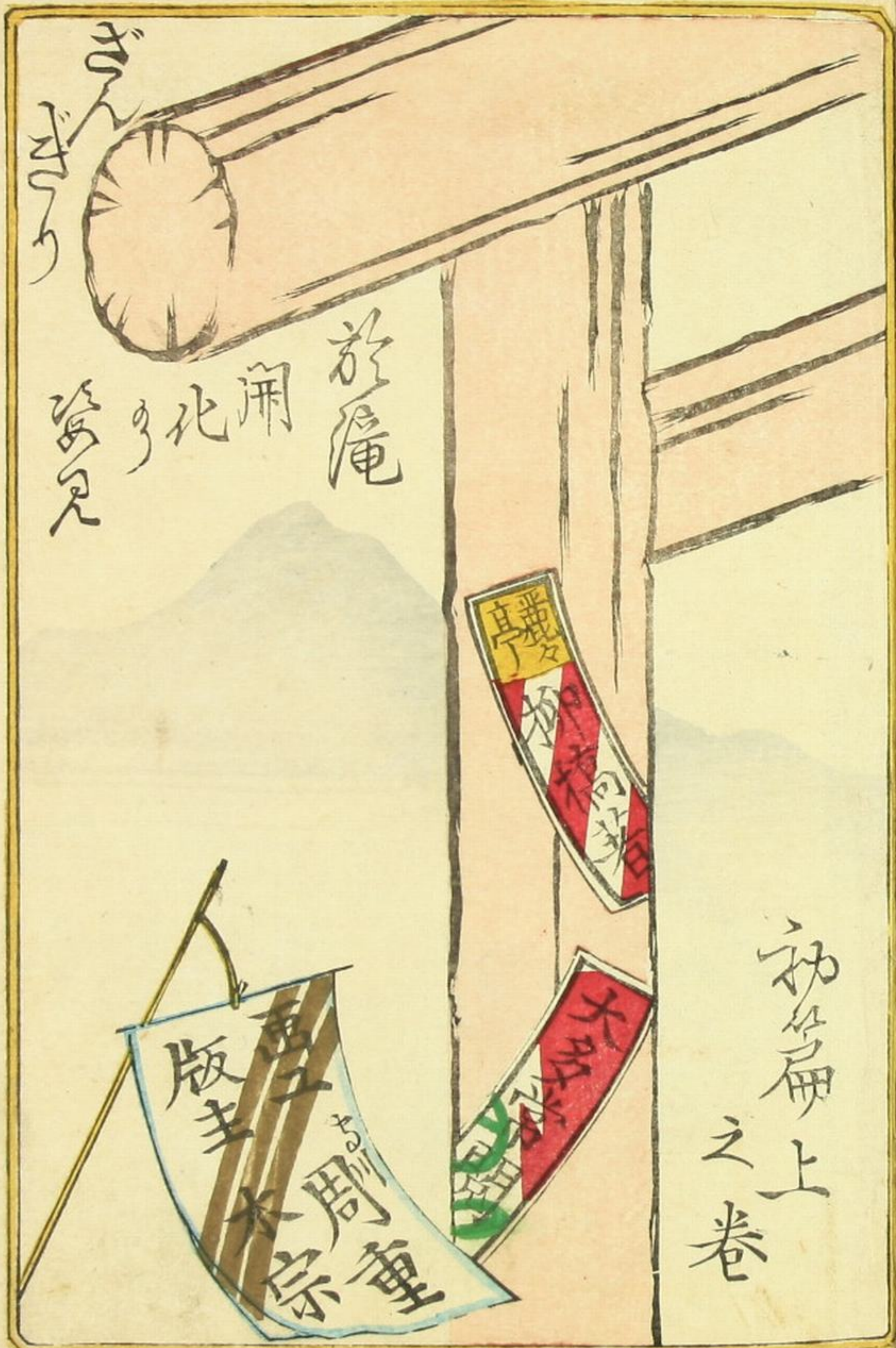
10

15

20

25

30



A 451



448-8085-2



古川司南土筆

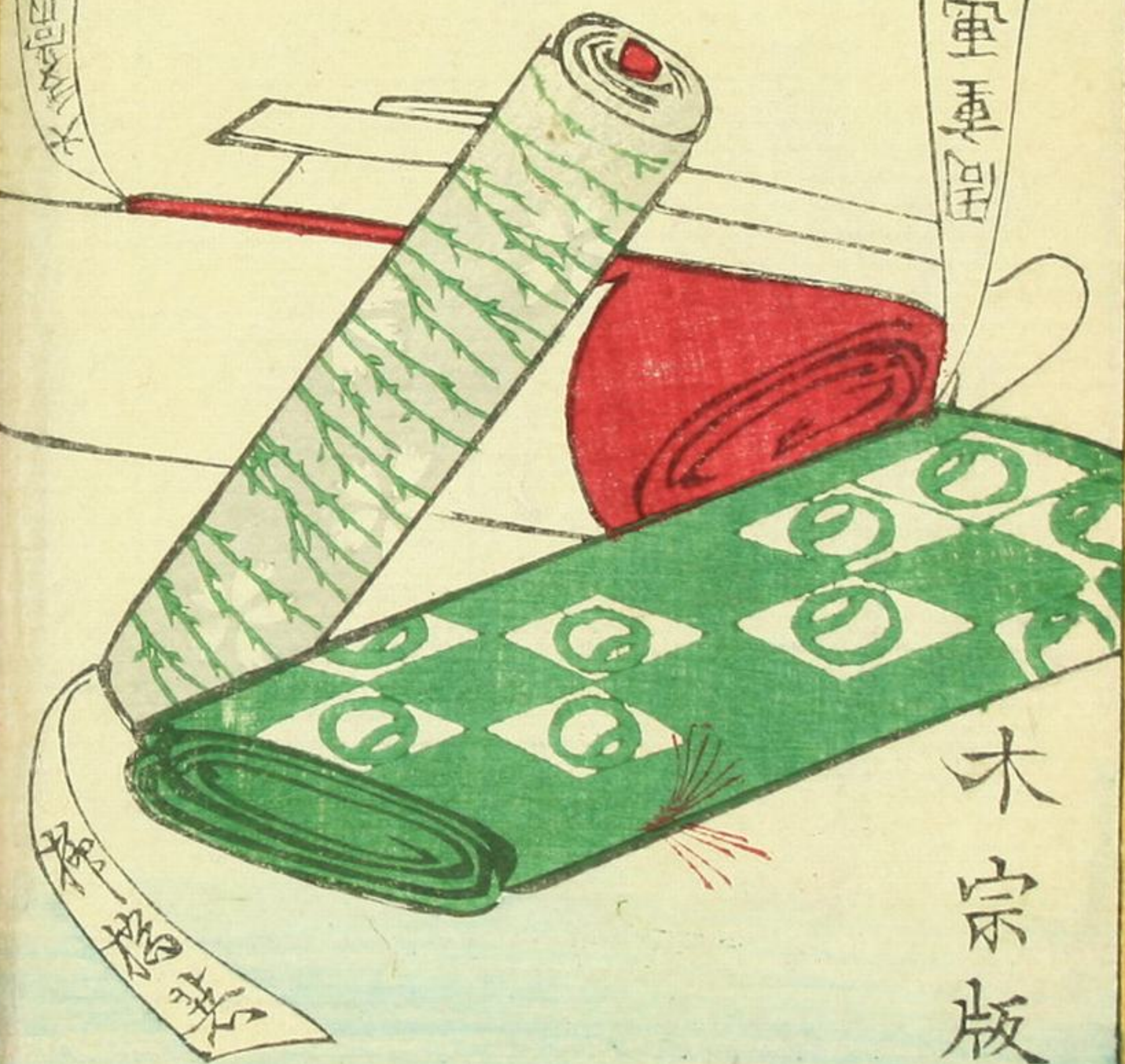
初編上

散髮  
阿滝  
開化  
姿見

初編中之卷

大正

軍要



木宗版

散髮於瀧開化女見

初編下



初編中

きん  
きり  
於滝  
并に  
安見  
初編  
下三巻



大多常閑  
撰るる柳橋著  
守川周重画

木宗版



同

残裁床の建棒有平巻の髪髻より朱の旗章の目印の  
牛肉鍋が寶丹の音官御せんが賣藥灸點按療治何でも  
西洋傳習の肩がきろけの流行るゆゑに遁さぬ戯作者塊  
散髪於瀧の履歴を著る少々の事實も有平糖甘口  
專一殘裁の剪と残しを後追ひ開化は賣ふ長吉が西洋  
小間物の温落を拔ぬ持た病ひ天誅回る地球の上は意路の  
旅立長譚りその概畧を記載せしが茲は有平の建棒を  
目印に御評判を高く編ぐひよりの

明治十一年第四月

東京大多常誌





長吉

旭久作  
娘  
於  
滝



香具師

伊能權之丞

散髮於瀧開化姿見初編上之卷

大多常閑  
麗々亭柳橋著

世の中三日のむらさき櫻うねと代る世鬼の上中下二巻世帯の  
 其中より下巻のむらさき八丁堀の借家小世とある丸亀の藩の  
 旭久作(五十五)と名づか先年悪事のなす刑罰とあり妻の  
 お徳(四十二)の娘於滝と二個ぐらじ隣家の小雇宿として田舎  
 流石の周旋やうである桂庵出方のお幾はあつ世間活よと  
 ちやて娘於滝の眉目より死なぬお北の上をまご超ぬ花香の四方の  
 白くの人ぞあるお幾の志きりと田舎流石の勤めあつ三社借  
 での下巻常陸鹿島香取よ浮洲の村社船やつてまきの佐原の  
 町の角白屋といふ茶屋流石の三社系りの出送りのつ及



か  
瀧  
初  
上

三  
角  
白  
屋

つぎ客も群り

於瀧屋の子も

勤めよ任せ

下迄依る人

極きふりり

実明よつと

めて母お徳の

許へも多

分の金を

贈り言ふお三

筋の世にころりも仇

めけて玉と欺む

娘のか滝その頃

同所よ副戸長の

伊能持之丞と

りの者ありしが深き

此お滝と云ふ

あつひ度々

かの角白屋

よのころお滝

と座しよん

ゆで愉快

金龍初止



且

那のさ

あつひ

外は伊能

が意あつひ

度々

お三

ひ金田の義

理よめんとて終

中ころりあま

於瀧

金ありそは

ぐんせんと仇の

安よ見惚けん

顔も

似もや

心悪

夏

於瀧も伊能の

いぢり断る

度々口後

於瀧も伊能の

顔も

似もや

心悪

夏



深く色香は迷ひ一伊能が意ハ附入  
種くもの御多くの金を漏ししじが  
於滝うんは藤ね伊能持と堅通ふ  
乃とえれたちきとんと胸と  
痛めてのりけらわこ

爰は甲州山梨郡  
府中よて字  
令別堂の出生  
あて香具長吉二十八とりの  
者ハ毎年八幡の町名鹿島  
香取の市町より西洋小間物  
あてと商ひ小間物しり



伊能が意ハ附入  
由口あどふ  
物と言ひしじ  
人目のせれ  
わとて三箇  
の家長  
の目  
を  
調子

は依系丁の角白屋と  
定宿どくと到り松葉  
の暇よのち多し小雀  
ひの女あどもをあつめ  
三味線ととつてあつめ  
うとや二上り都々あつめ  
謡ひと浮く周子のあつめ  
ごちやと



見く於滝が意ハ彼の長吉も仇あ  
次女よん惚もひん長吉も此家よん惚も  
はれバ一寸か酔よ喰ひとめくも遠くあり  
て日忘れくも  
木信傳の糸  
かひ合  
胸の中  
五ひか

深の中とある物の彼の長吉の

花穂ぎ於庵の此あふ

買はて身うあふふ

あふね二個が才の上

ゆくと此宿を抜出で

廣の東京こころ

ふのし素より大膽

不敬の毒婦の

於浦人目と

あついで女と

うん長逗る

の長吉よあふ

かしくもあふ

先ずお今

長吉も多々の

うんあふ

於庵のみ

よん

割烹

代りて揚代を

度くもらひ思ひ

合らる中ゆあふ

都合とてあふ

あふあふ

あふあふ

冷室の社



その情

愛の意

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

六

衣類を脊負させ伊能が

あふ長吉と招きよせ自分の

酒十分ちちて置きて

酒術で編み

種々の

伊能持の

香玉球ひ

於浦の色

長

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

つぎ 藤原の這入り落葉の下へを

△このまゝと付くふぢ不  
こゝろを立ち折るうら

さーいまそ合十奉あゆりも  
入まそあも紋布を  
奪ひは合十と

明治七年

八月

三日の

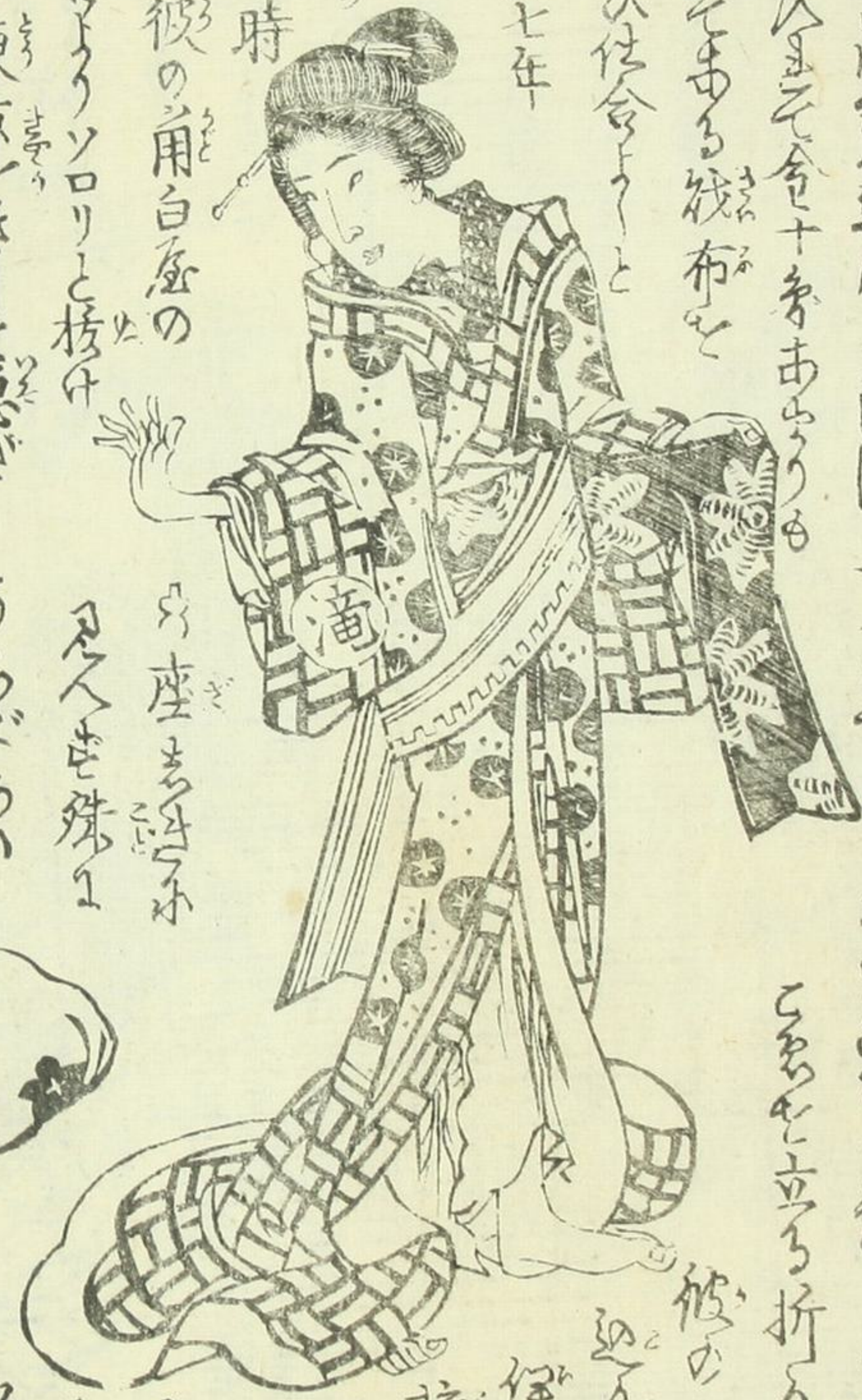
夜二時

ころ彼の用白昼の

書屋よりソロリと抜け

出ー東京とまゝと急ぎ

けらふ



ひ座まはすふ

入へき殊一

うらごちの

明けそらふ

彼の藤

伊能

持の

雲

びろ

ろき

を

松のこを

しゆん

此宅の

料理

目と

さき

室内の者

のこまを

起しと

香具の長

吉の二個

穿ぬる小針

たりと



えん

ろふ

紋布

これ

まろ

まろ

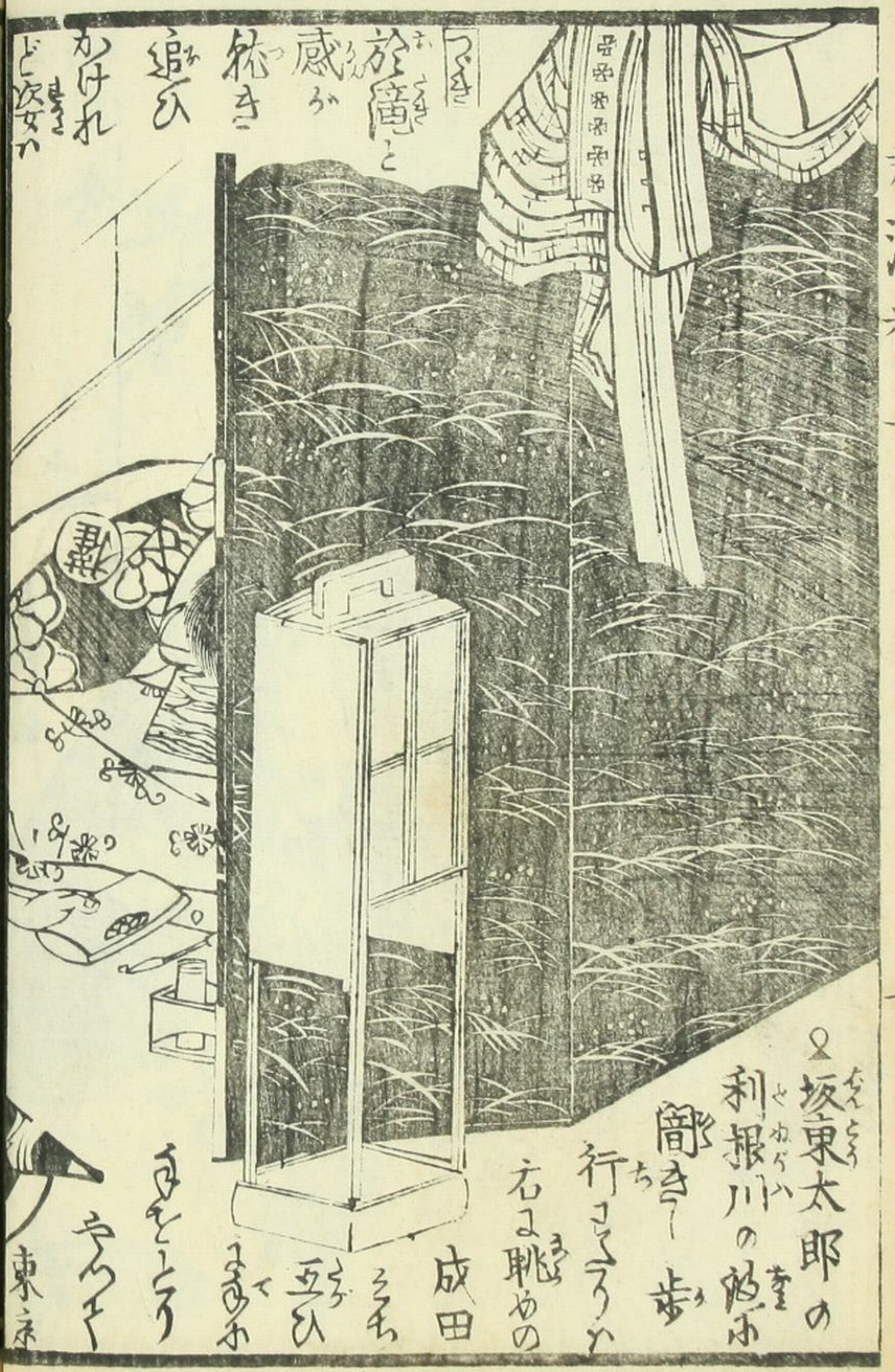
今 音 刀 上



最早  
かひれ  
遊ひ  
然き  
感か  
於箇と  
山寺  
再説  
突き  
三時  
陰々

日探え  
あらし  
見  
壺  
見  
てハ  
着ハ  
丁  
の母の  
もと  
日

於龍刀止



最早  
かひれ  
遊ひ  
然き  
感か  
於箇と

坂東太郎の  
利根川の  
簡き一歩  
行こころハ  
右ハ眺めの  
成田  
五ハ  
まハ  
まハ  
やん  
東

方清



入念範切

行徳  
御濱生

宇田川  
尋ねる  
春吉

悪計を  
於滝

山吉五弟の  
許へ  
種  
の  
秋  
上  
職

長吉  
義兄弟  
寧  
浅  
追

北松山町へ  
ひき移り  
鶏肉  
世  
始  
お  
お  
止  
周  
同  
世

赤活初上

が



つゝ密ひそくふ八丁堀やちぢほりの古郷ふるききょうと  
便たやすりて様子ようすと

又判せん然ぜん  
せねもん

▲窺うかがひ

見みるゝ疾はやも

母ははのお態たいの再漆またしきの

妻つまの縁えん舟ふね行ゆ先さきぐも

◎木挽町二丁目

四番地よばんぢ僅わずかをりりの

知しるべもたよりける

定價十二錢五厘

初編 明治十一年四月十八日御届

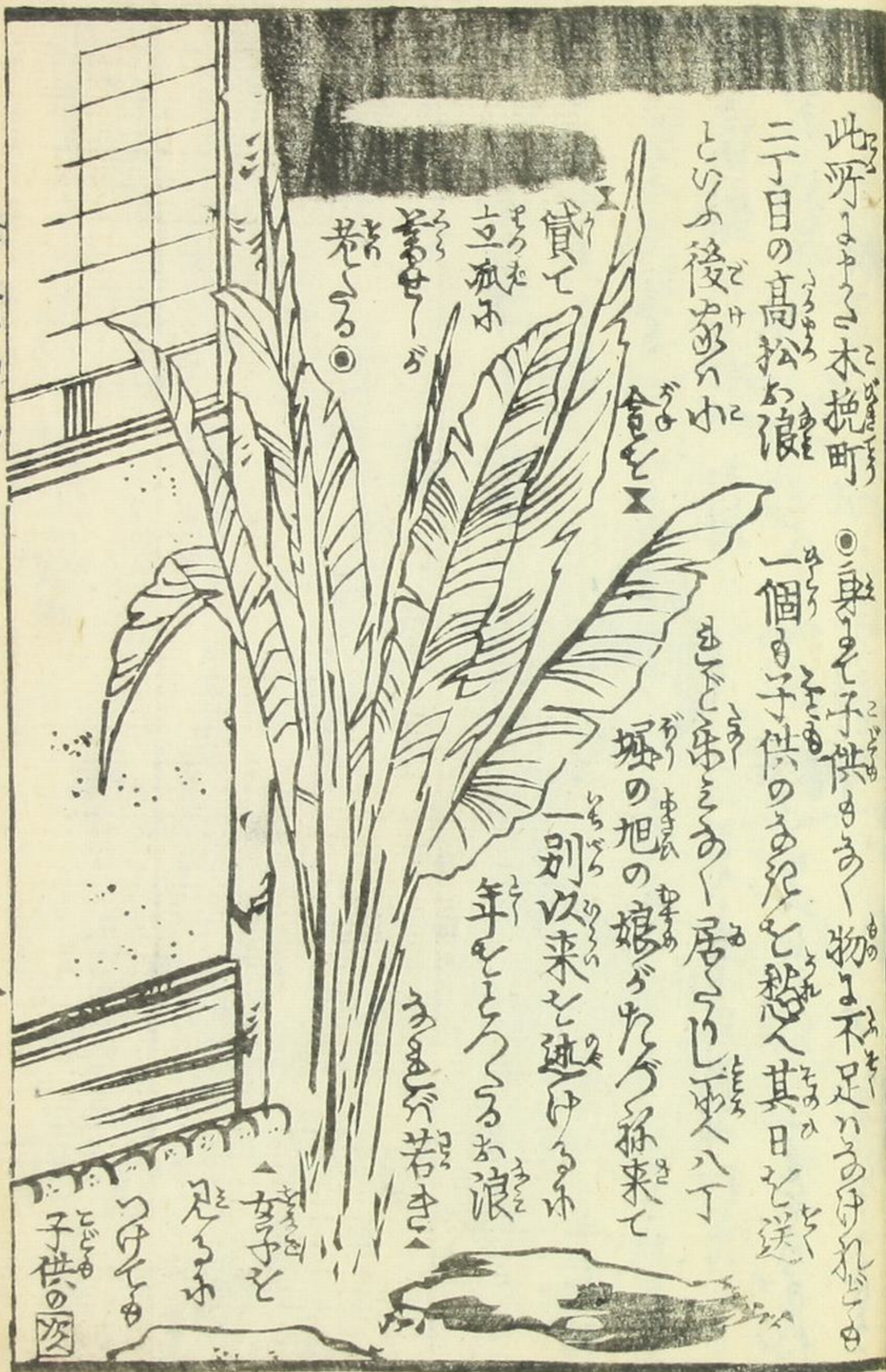
編輯人

南植町十二番地 齋藤文吉

出版人

馬喰町四丁目十八番地 小森宗次郎

高



此所より木挽町  
二丁目の高松の浪  
とこの後かたか

●身も子供もあつた物不足のあけられ  
一個の子供のあつたを愁之其日を送  
堀の旭の娘がたぐり来て  
別以来と進ゆるか  
年をとらるる浪

賞て  
立派な  
老るる○

女子を  
見ると  
ついでに  
子供の図



わが家のあひだのいふ不足は多かりけり  
 田舎を離れずの儀をばよりのいとよき  
 ありぬ音信もあへてお茶の實母も  
 縁なす先とあへてお茶をばよりの  
 東京へあつて実母のとより入  
 れて入ると聞かしてははたしむる  
 母の居ぬるをばよりの  
 是との便宜も  
 所もば餘  
 義あつて宅  
 何んはははは



あつてはははは  
 是ははははは  
 切よは前は父上  
 何んはははは  
 強つて居る  
 有るははは  
 人よ依  
 此の  
 へ  
 泊  
 こと

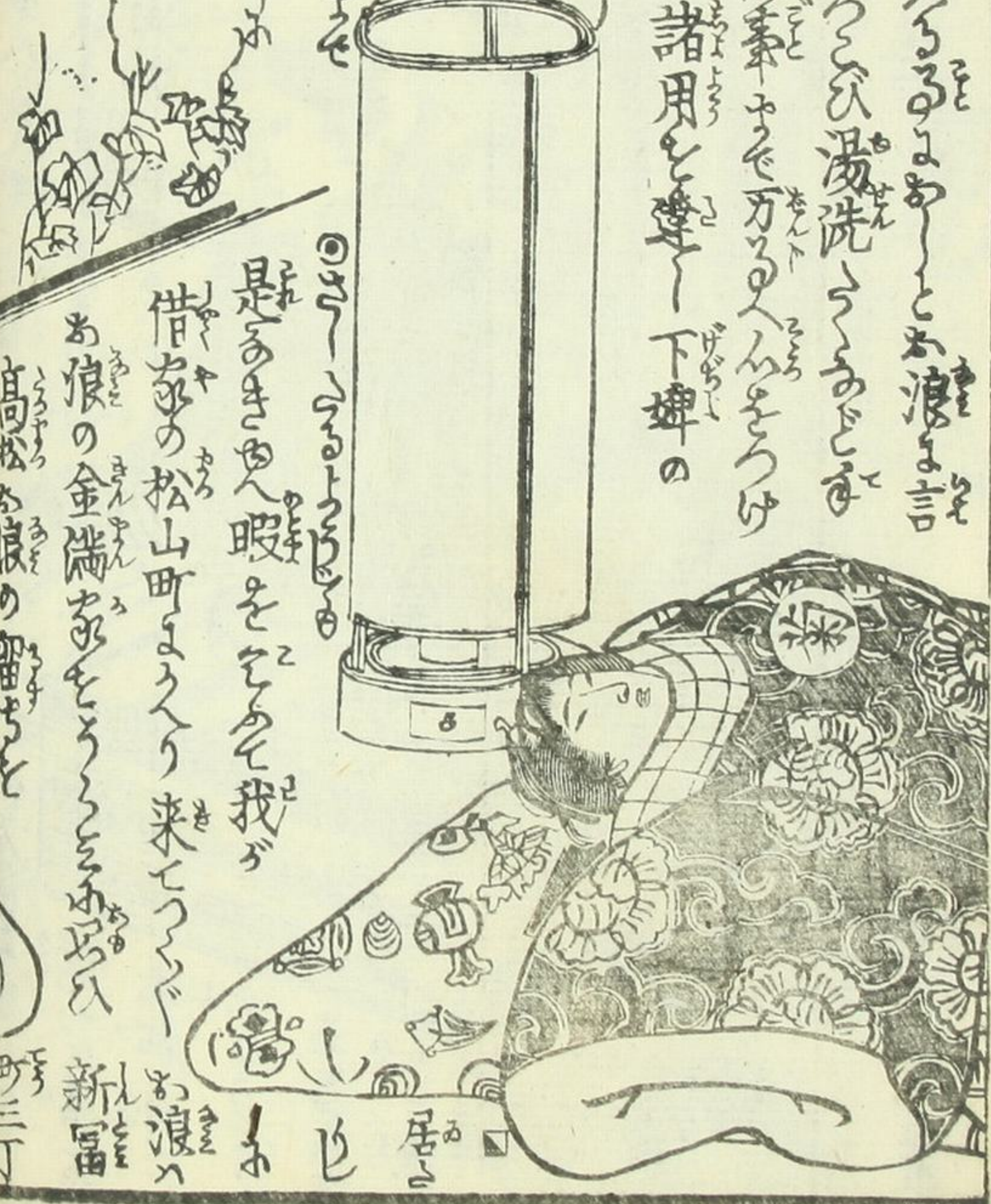
申す  
 其中母の  
 縁なす  
 その先も  
 何んはははは  
 あゆら  
 御用が  
 あつてははは  
 あつてははは  
 あつてははは  
 致しははは



時々人々の言ふにわが言ふは浪言  
もそ於滝の湯洗うとて  
傳ひ又後には素衣を万入る人そつ  
お浪はあつたひ諸用を遣下婢の

お菊三の我が  
妹の如くは  
眼をかくて勝  
手其所のるのやを

深切の身ゆみ  
お浪の滝を  
我が娘のつら



是のまゝ暇をこめて我が  
借家の松山町より来つて  
お浪の金端をうらつた  
高松お浪の留を

引付万事を  
頼にがが滝  
あふあふ日産  
みよ来り身  
あま泊り切  
あも成うと多  
くの浅草松山  
町へなれど此宅の  
宿子のこころを吞  
ゆんを海まよ  
通ひあつし其の  
中よ女主の事あれ



あま泊り切  
あも成うと多  
くの浅草松山  
町へなれど此宅の  
宿子のこころを吞  
ゆんを海まよ  
通ひあつし其の  
中よ女主の事あれ



つぎ 務ま  
高松の

大膽  
不敵

於滝  
平気で  
息随て  
居る

痛やく  
居たり

① 家よかん  
お菊の涙息を

考ひ一室よ抜足さ  
足して這入るこも簞

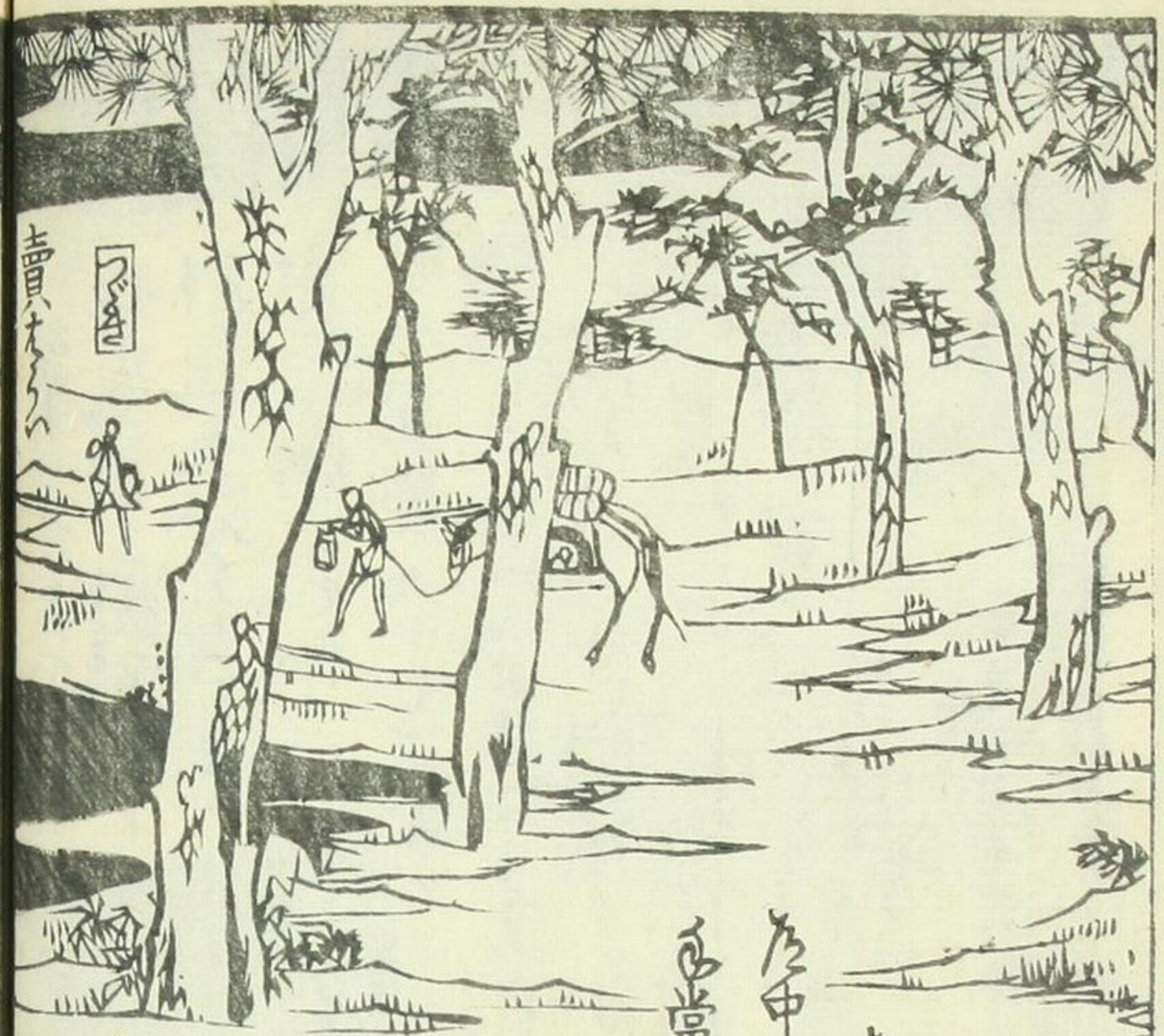
箆を合健よて押し  
閑き貨幣六十七四余と

雑品四一をも奪ひ取り其夜  
十二時頃ソツト我が宅へ帰る夜

四品を疾くありありの明儀の  
中へ多暗は押しこめ人の目よつらぬ

から又熟く考へて見ると是中を  
御世存よまう恩義のある家の令口

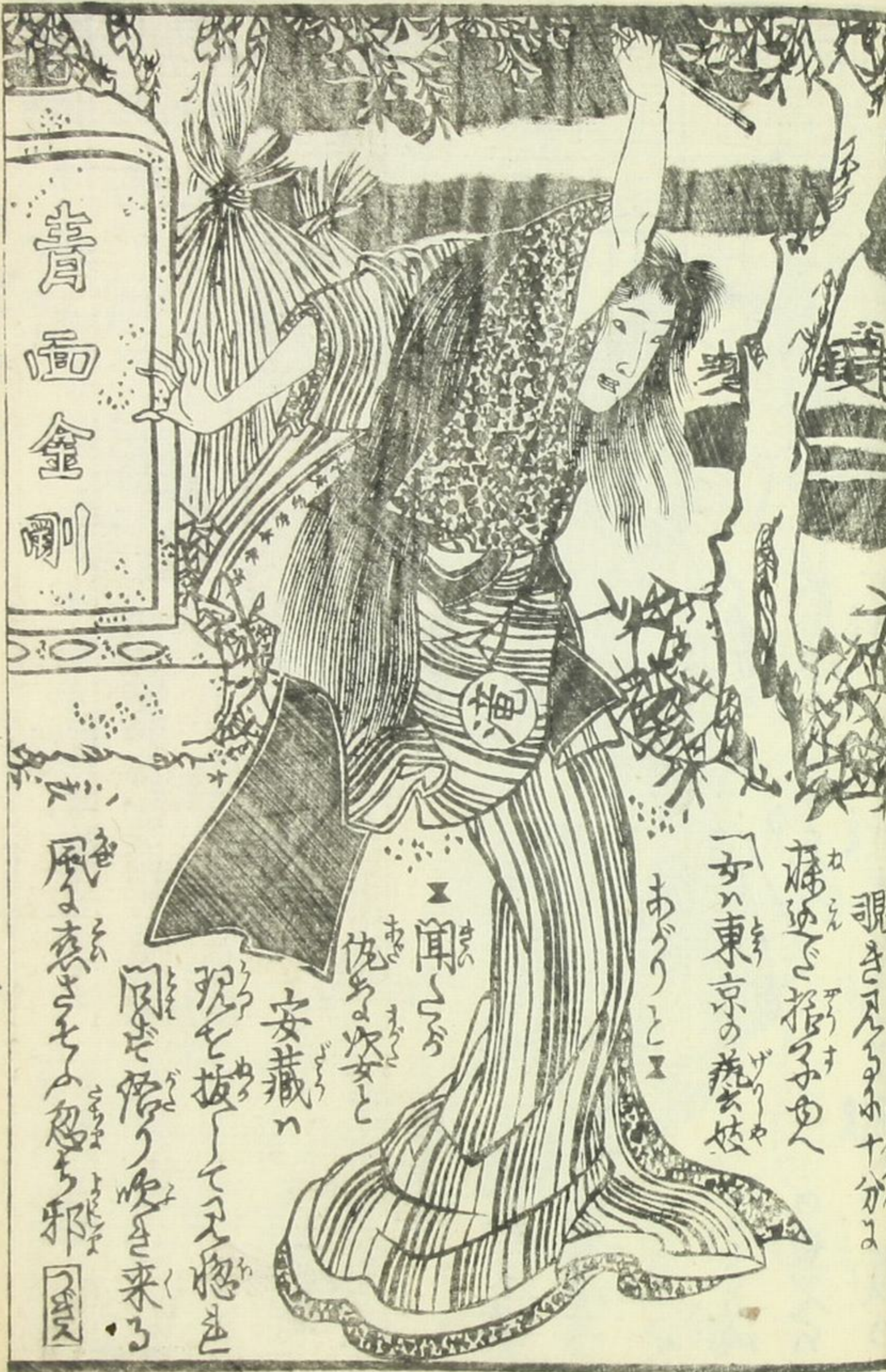
盗まうと面目の今も何招るものかと  
具をつ



方澤神  
 伏見さんと東京の方へおも  
 むんととて熊谷より足をと止め  
 乃中の荒穢き方引くこと  
 自當り次第小穴夜血を働き熊谷  
 路を出立しが夜道よか  
 長堤四里八丁も其往古五  
 里い余り道中小望む折  
 ころ宿をぐもふ屯したる  
 人力車夫が五六人其うち  
 一人先之近め姉御  
 車を降りやせうと勸  
 めは何せと承けしめりて  
 しそと夜乃の徳  
 此車夫ハ  
 上州  
 碓氷  
 郡



群馬縣下  
 長吉が居所を顔  
 更に辨せん  
 悪僕少く  
 上後田村の由立  
 めして中仙乃  
 人の知ら蜻蛉安  
 とりかありの  
 悪僕少く



青面金剛

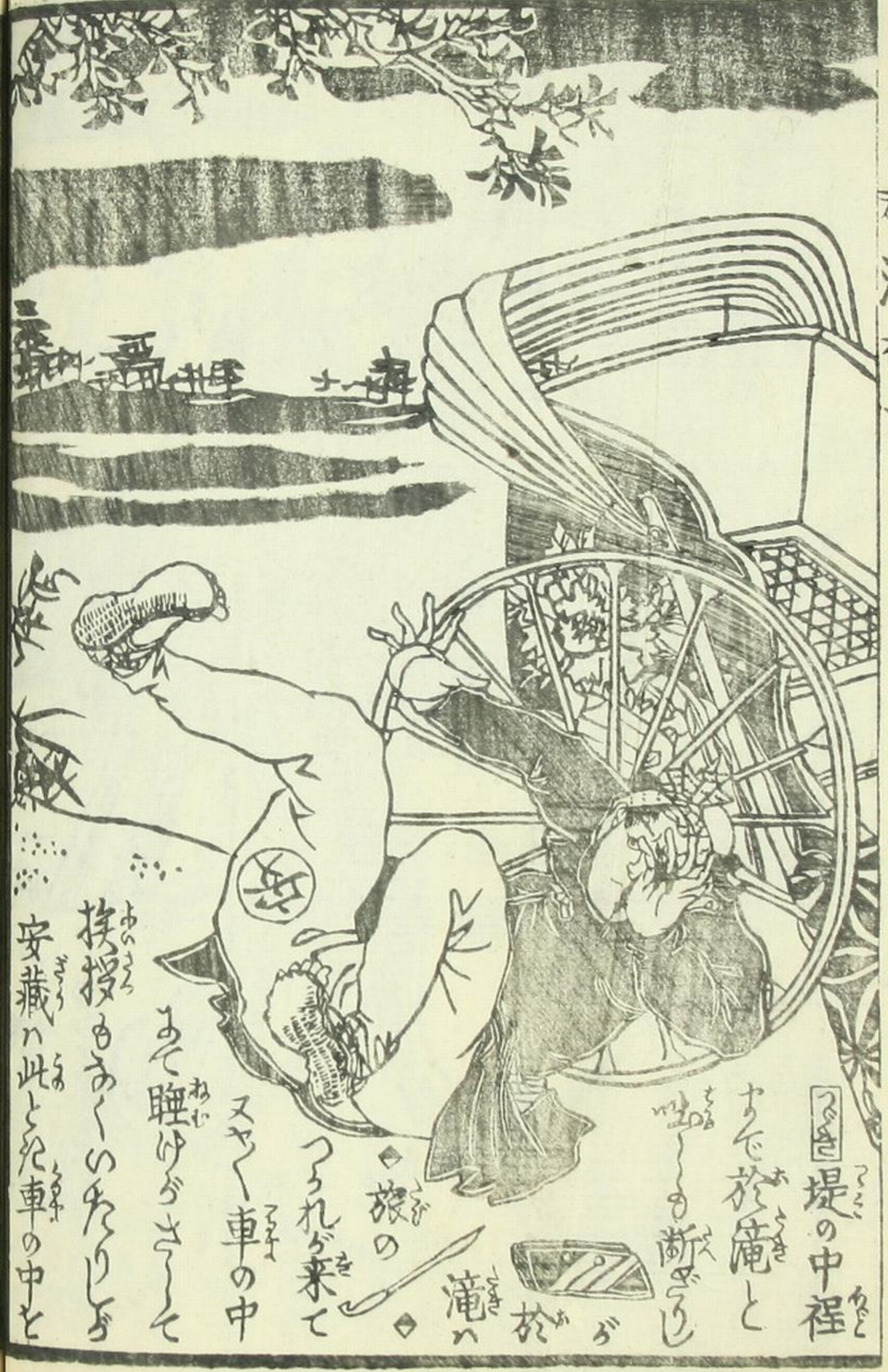
風よ哀さそふ忍ち邪

現を抜くて忍色

聞く  
安藏の  
仇

あがりこ  
かゝ東京の義太夫

観きえんふれ十分



赤澤村口

安藏ハ此と此車の中を

よて睡けがさそ

つれが来て

安藏ハ

堤の中程  
たを於庵と

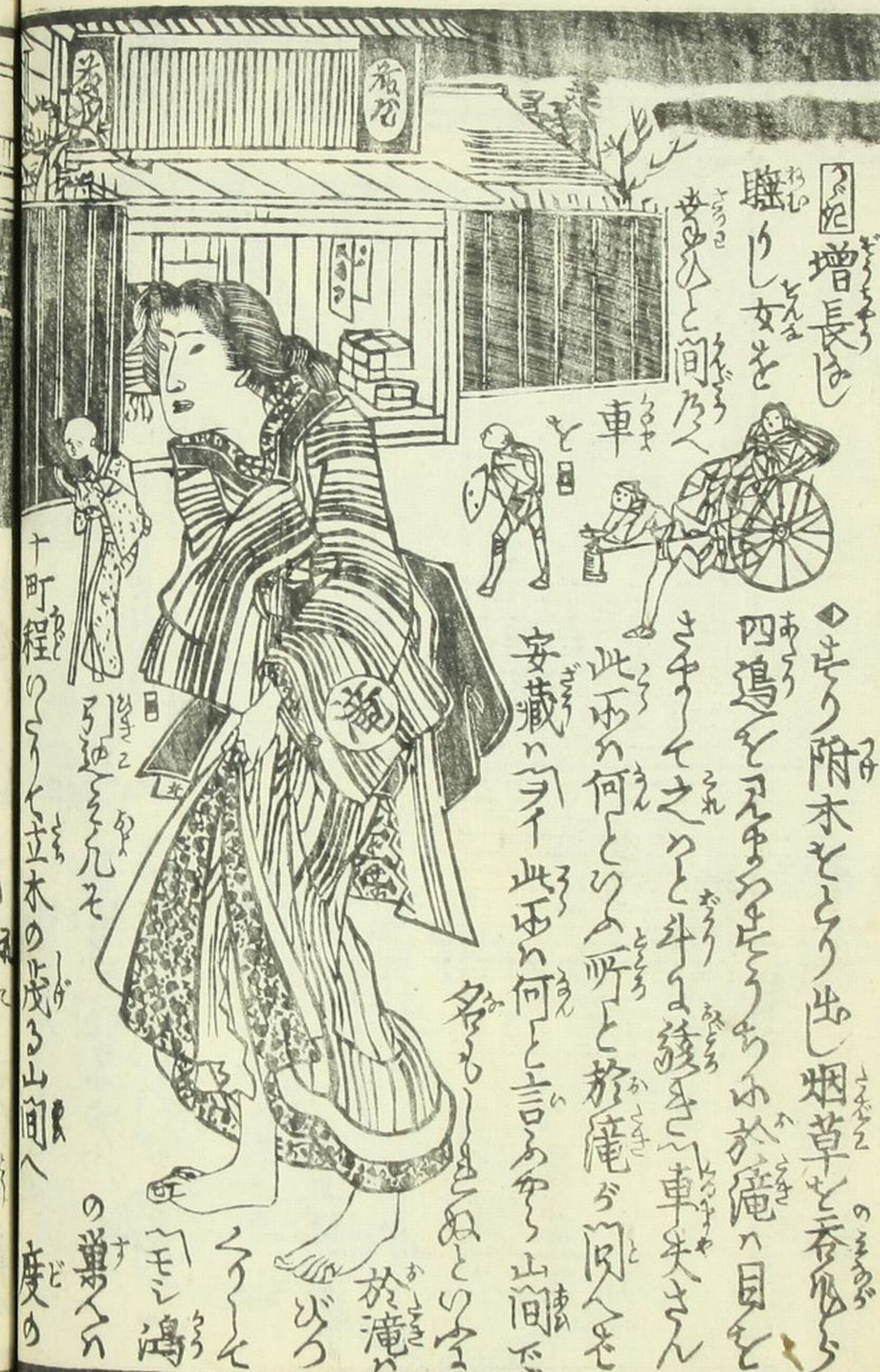
青面金剛

二

三



連はてしなく車と止め  
 へんやう安へ  
 安藏の  
 姉柳  
 鳴の巢  
 中言ふは於庵へ  
 打らぬ大擔あるは  
 居るも安藏の言とて知らし柳  
 斯あつては是非の扱ふは  
 ありあせんと於庵を引捕へ



増長は  
 馳り女を  
 車  
 安藏の言此何と言ふや山間  
 此何と云ふ所と於庵を問へ  
 四鳴をよみまらばさうあつた於庵の目を  
 さうて之りと斗ふは茲を車失さん  
 此何と云ふ所と於庵を問へ  
 安藏の言此何と言ふや山間  
 於庵  
 びろ  
 鳴の巢  
 姉柳  
 安藏の  
 度

立  
うら  
於庵  
今の堪へよとぞ  
右ふみ持てる簪も  
安が眼を覗ひマツト  
りし声もろくもふ右の  
眼を穴ちを貫ぬき足をと  
上げく秘授と就ち目  
散る証のけろふ安の足と

うねる傍へ  
ドウと例を  
目が暗く又頭を  
起しう於庵の  
もややうかんと  
せふ於庵の辛く  
と山道と外去り  
わろくと人里よ到り  
鴻の巢道を覗ひ  
ける折く此のあ  
来くる人の鴻の  
葉の藤屋治兵衛と



田舎小  
見做  
美人  
行違  
はらうり途中よ  
ありて熊谷のを  
たふりき帰る及  
はらうり途中よ



カコロシ  
人々多く  
雇ひの  
ゆへ  
稼業  
渡世と  
者まで  
たて

龍ノカ

龍ノカ



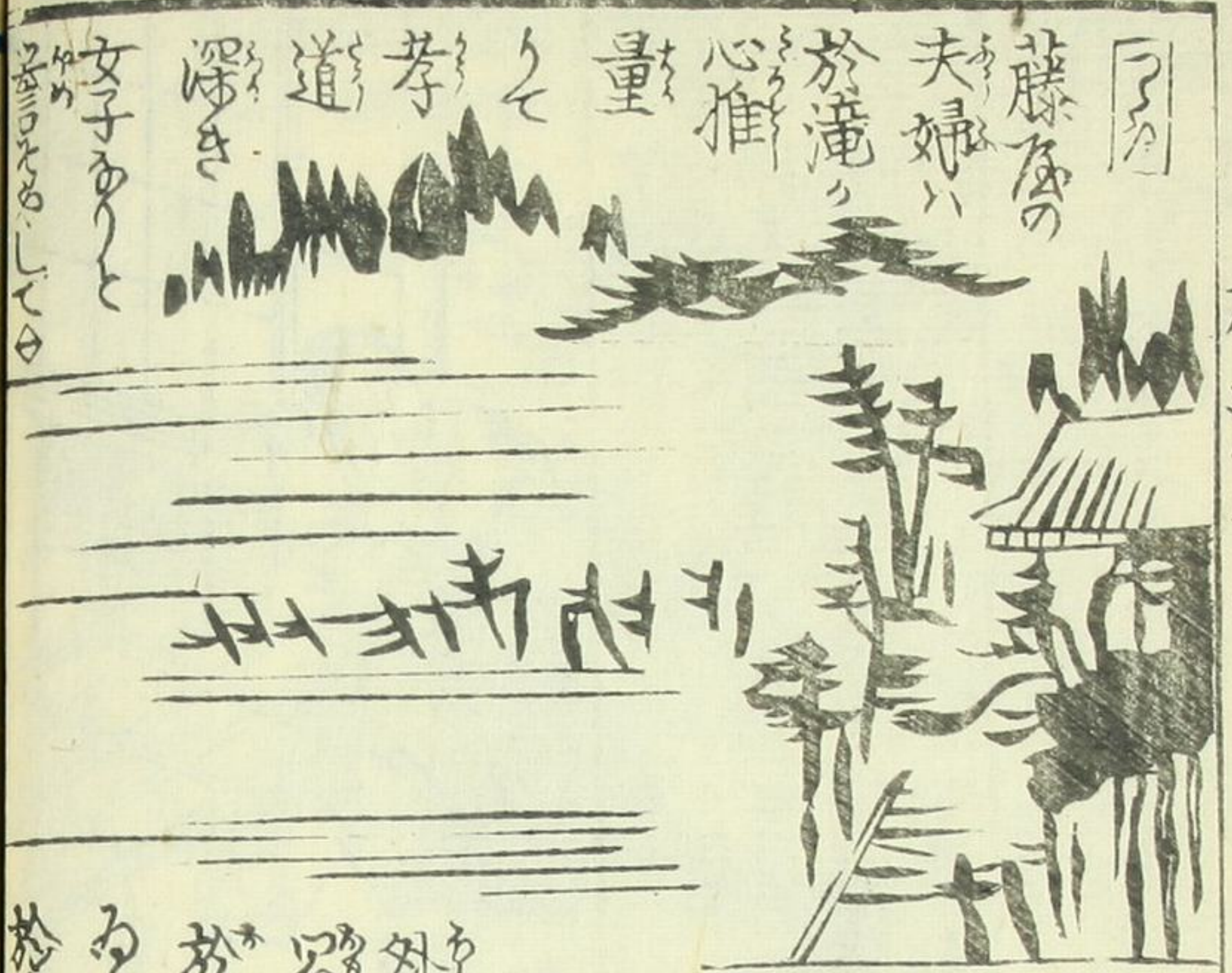
か眼よかたりし地獄で佛の聲を  
あゝと蕪きの程涙然よるは  
我ちのほひける又於滝の密夫  
長吉を尋ね上州よりしる出  
會せしとて東宮へぬる  
又此の鴻の巢の藤を足と止  
治兵衛の物堅の人物を  
猶々聞か及び一母の行衛  
をさかめと傍りて述ぶ  
置あ逗るは  
毒婦於滝と



つた女  
治兵衛  
ちとら  
車  
の  
次弟を聞れ  
終に我が家の侍と  
於滝の顔る毒婦あまの涙六の声  
あつたて今日黄昏  
熊谷の  
旅の  
疲る小睡け  
終に此の山道へ引こまれて  
身ちよ為しと成  
あつたて今日黄昏  
熊谷の  
旅の  
疲る小睡け  
終に此の山道へ引こまれて  
身ちよ為しと成

車を  
甲の  
鴻の巢  
が  
いそ  
りそ  
が

於滝初中



初編 明治十年四月十八日御届

宿の不足  
 ありふは是の  
 於滝よの徳を  
 於と下婢と共  
 働つるせし  
 万事よ氣が付  
 治兵衛夫婦の  
 外に依ひ我が身守の如ふ  
 於滝の客の扱ひを頼  
 るるに慶へ埼玉縣廳より  
 於滝の身の上探偵あり

定價十二錢五厘

編輯人

南植町十二番地

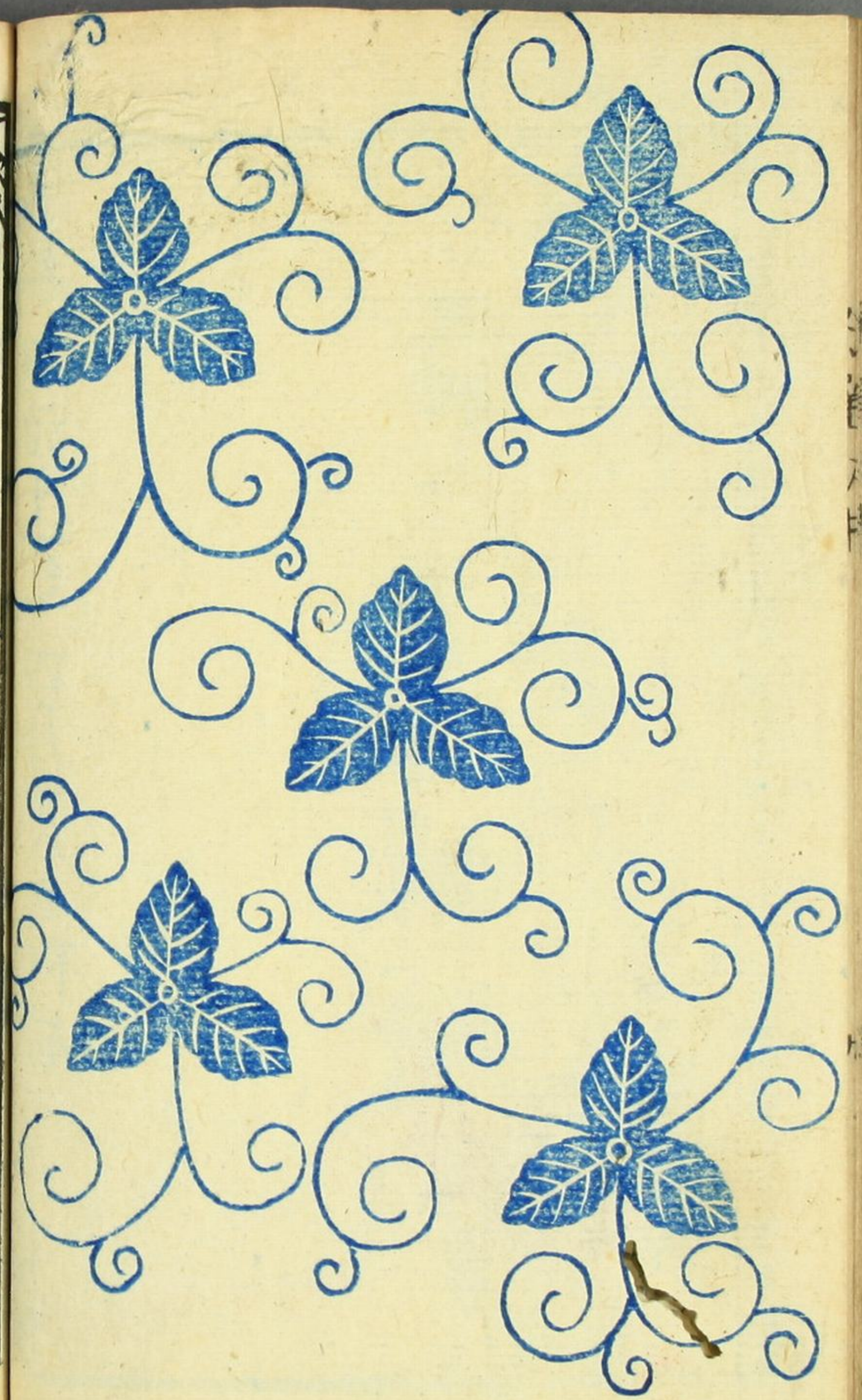
齋藤文吉

出版人

馬喰町四丁目十八番地

小森宗次郎



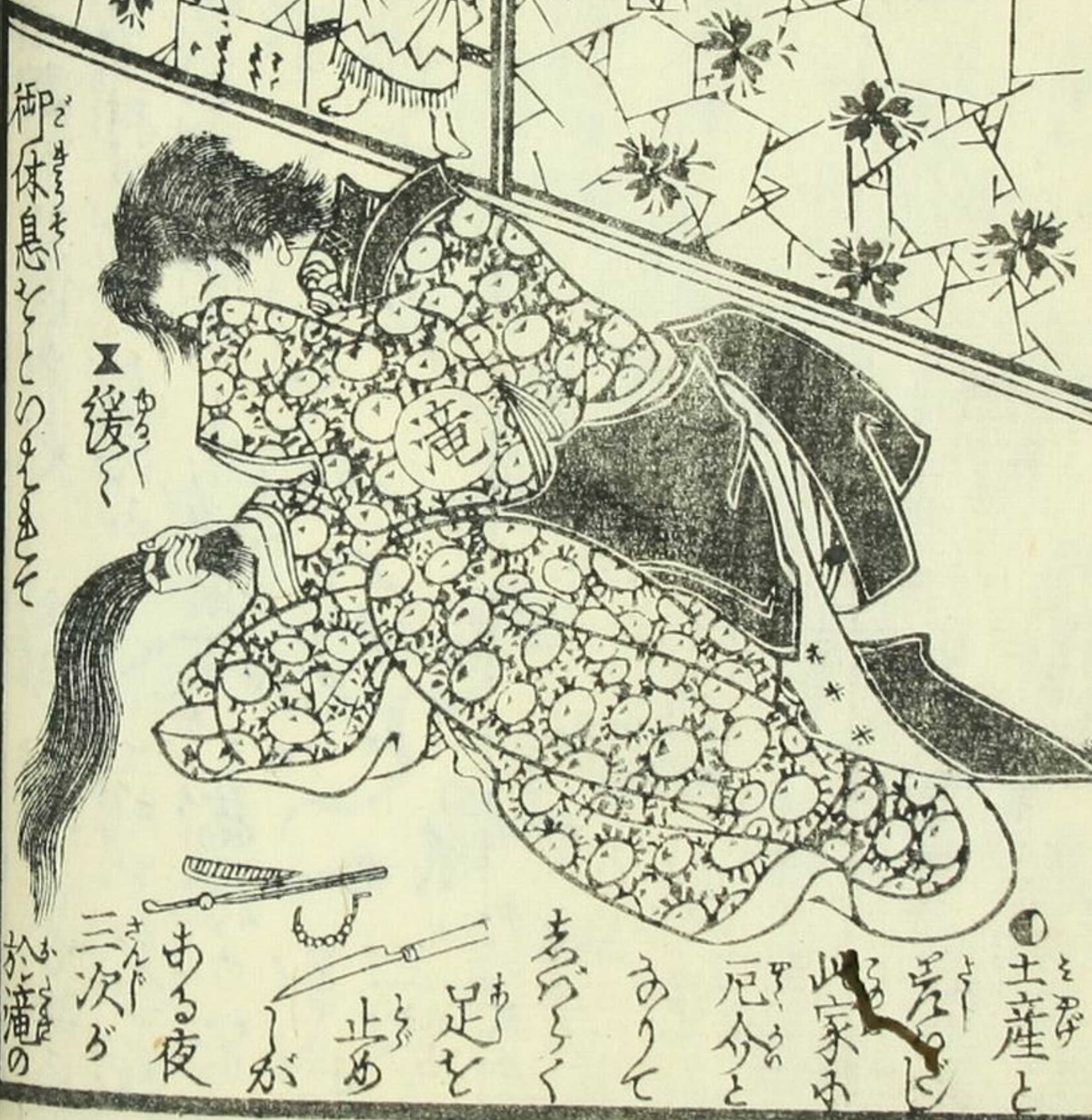


高

借も於滝の埵玉縣下を後よりと  
 東京府下ある五子村の捨尻の赤み  
 一夜を明し翌日我古郷の  
 八丁堀より母の縁付しその先々を  
 探らんとい思入るも  
 心づかぬは昔  
 悪の△  
 △胸より物ある故に  
 工用をかへて板  
 橋の駕  
 箆擔  
 三次を  
 たぐねん  
 此三次の  
 砂せん  
 於滝の  
 父九人作  
 十丸重の  
 藩士の△  
 △

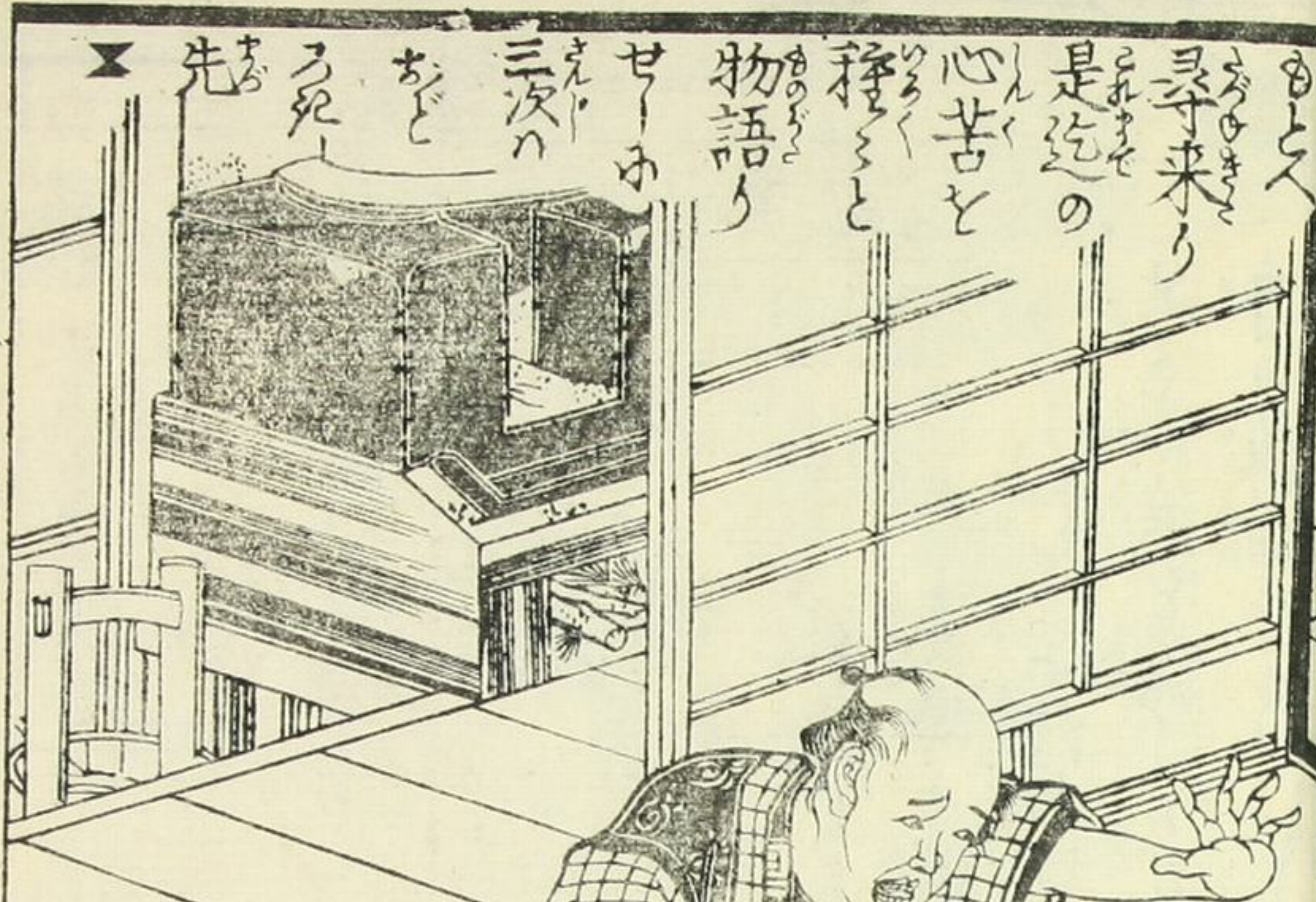
巻の六

頃より従僕小召  
 三年の春此板橋よ  
 きたり駕籠擔を  
 せしが今の廢  
 業て同の上宿の  
 水車場へ雇  
 人とあつて居  
 るこのあつて  
 於滝の夢ま  
 あつて  
 三次の



御休息  
 後

土産と  
 此家小  
 厄介と  
 ありて  
 ありて  
 足と  
 止あ  
 がある夜  
 三次が  
 於滝の

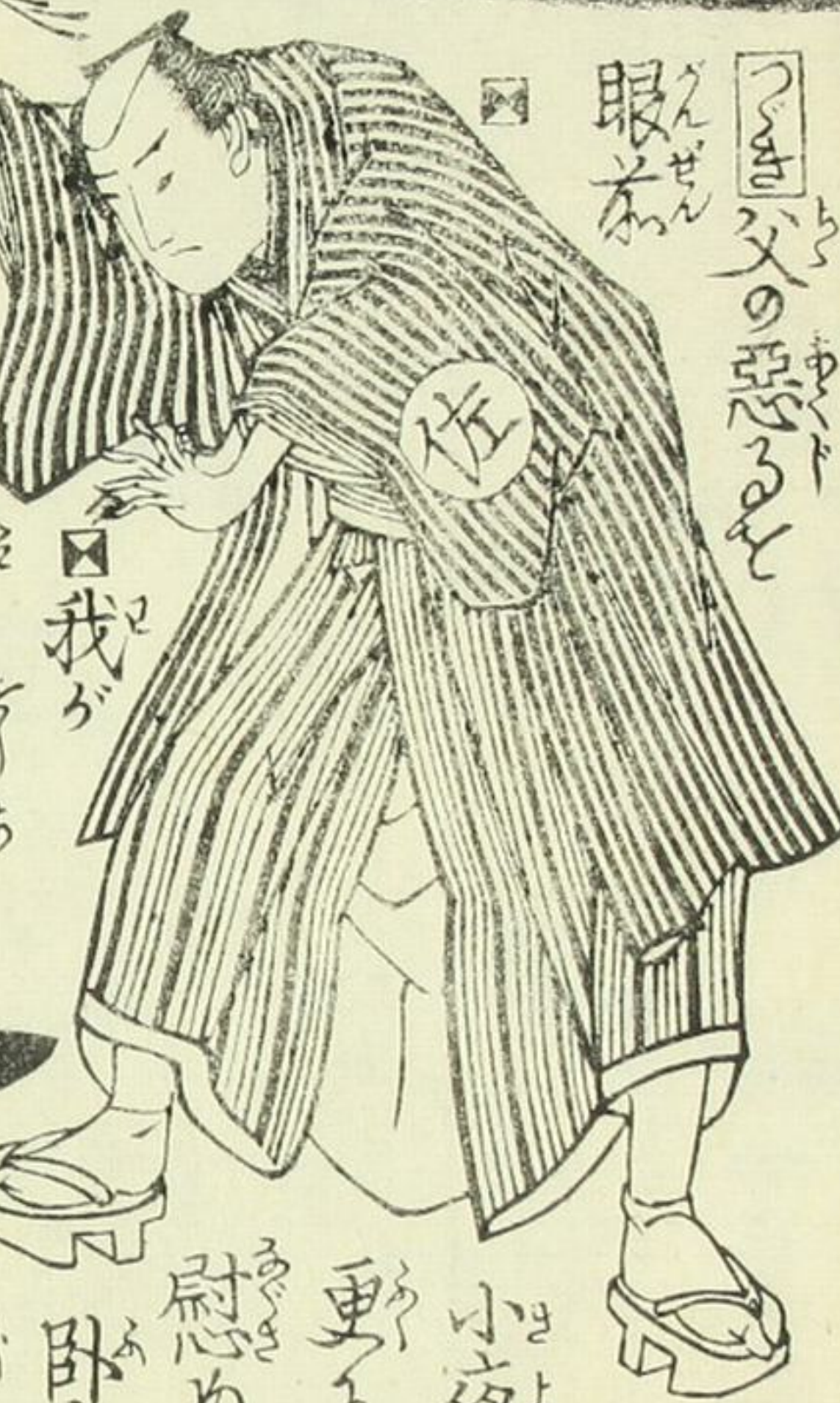


見つる貧乏の影  
 父旭久  
 作先年  
 刑罪と  
 あつて最  
 期とせ  
 事のいふ  
 季々物  
 滝の夢乃  
 涙とら  
 三枚紙は包と  
 三  
 父旭久  
 作先年  
 刑罪と  
 あつて最  
 期とせ  
 事のいふ  
 季々物  
 滝の夢乃  
 涙とら

先  
 る死  
 ちど  
 三夜  
 せし  
 物語り  
 心苦と  
 種々  
 是迄の  
 尋来り  
 心苦と  
 種々  
 是迄の  
 尋来り

かじろ三次がり人事実小  
 三

父の悪むと  
眼を



我が

身は押あて

語るは胸の

行流の毒婦も堪ふて

ワツと計り泣の三度も

共感涙を流し互ひの

身の薄命せし

主と従僕が戀する  
真心どろと身は濡む

小夜あは因果をせし

更なる夜も三度の滝を

慰めよ其夜の泣滝も

卧しどろとを翌朝三

次の例の水車へも

留る居あたる滝の

体は今又この父を

恨む我身であら

死の決心のあらぬも

何と因果を身の



上り

女中の

真底

中納言

言

年行

卿の

古き

幾度も

あはれ

あはれ

あはれ

つたなるむ  
まじりたる  
我ら心  
うねと於庵のこよ止め  
か糸とる盗人の縁切  
榎新糸をほ縁を  
切らむと利平の何と云  
盗人の  
縁を今更  
切らむと云  
髪の本幸より  
アツと切りし奴

●旅庵の  
まじりたる  
袖よそへ

●御最期が  
官のちひひ

●合ふのり  
あいの  
いん  
果と  
あか  
猶も



止め  
とほの他よ  
子細もあへ

厄と夕暮ちうん  
やうに次女は髪のも  
古木のうろろは納め  
顔より迫るて眼も  
泣擲ゝあたるあへ  
婦々来ころ三次の見ゆる  
よん吃驚後手二嬢様  
貴君の狂童の次女あんと  
迫つて子細の何れ左程の  
あひのこも次女を替へるん底  
何れ是れ子細もあらち  
顔より氣を掃む三次の底意



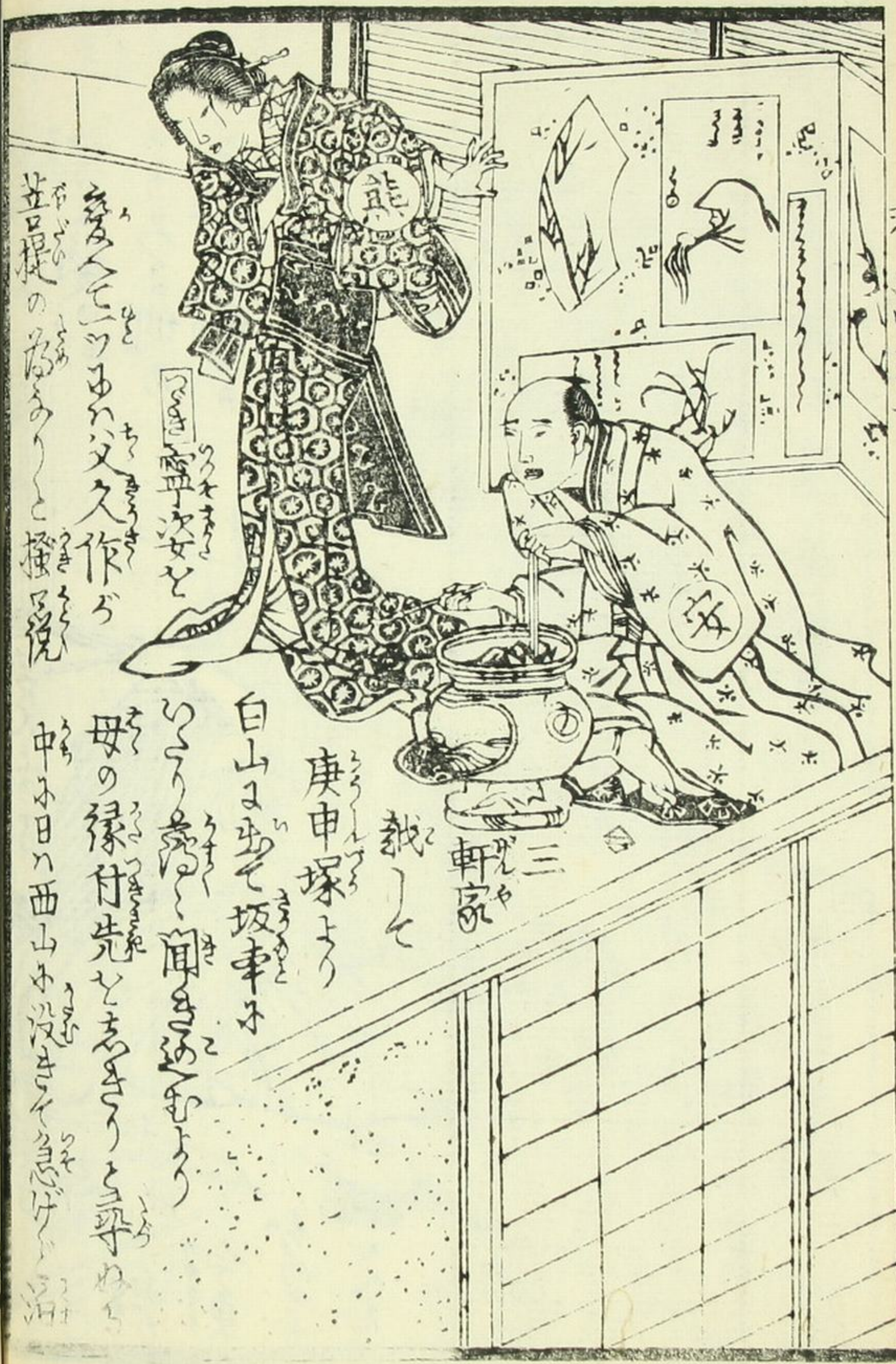
●佐  
口の上の  
今更  
迫る  
まつても  
うん  
ねど  
世間の  
人々目を  
つひにアレ大罪人の娘  
ごて後指をさへてる  
度よ肩が狭く



於滿の指  
 あつて涙を袖に  
 止め三次どの私も一個の  
 親もまはるは東あへり  
 母の縁付先を得な探りて  
 遠ひせりと俄ら三夜とつひ

五

五



母の縁付先と志きり  
 中より西山の夜を急げ

三軒家  
 紙と  
 庚申塚より  
 白山よ出て坂車  
 母の縁付先と志きり  
 中より西山の夜を急げ

つま 一個が天孫

さき 故詮方

あ 花川戸の

親らぬをさぬて

スゴくと帰る

おろ 待乳山聖天

の 表と

向 久抜

けんを世

折 玉環て

待 さまけ

つる大膽

不 てるの

毒 婦の於滝

人 ともんけ

美 尻の俵よ

六 字の拍ふ口

こ の人細き帯

ふ せうけ松が枝

後 まで死あんとする

その 身を確り抱

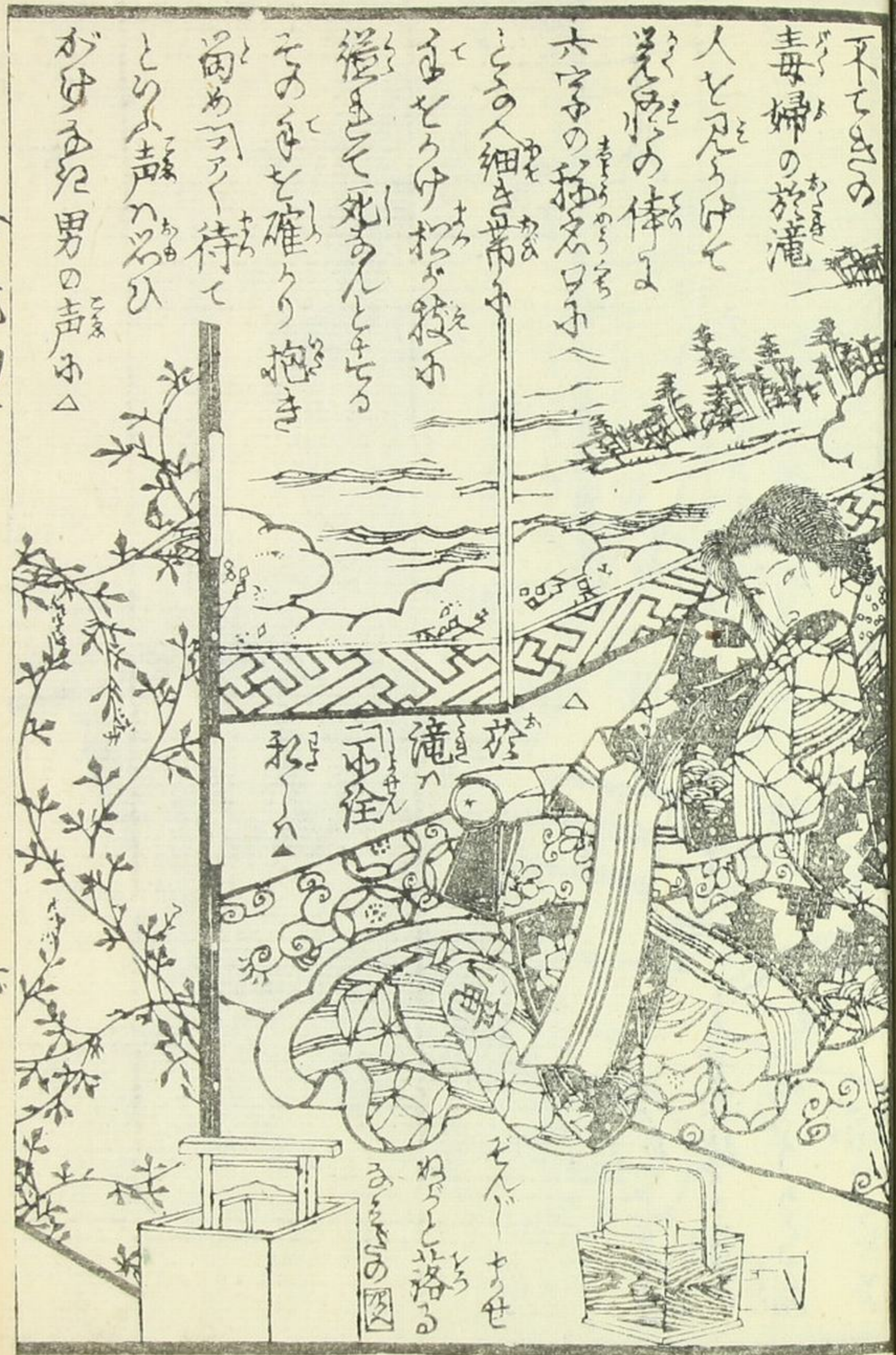
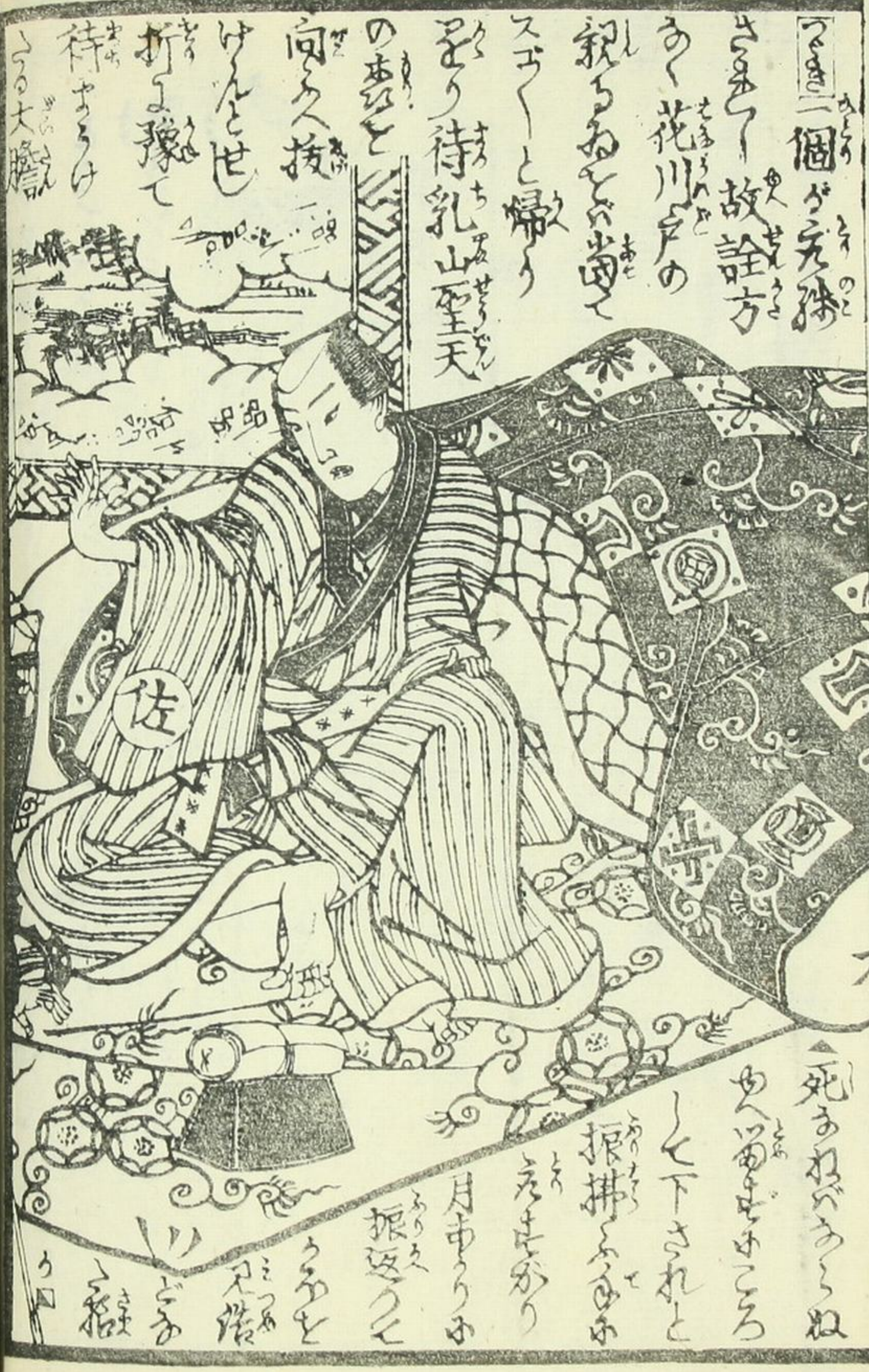
向 めつらく待

と の小聲の必

お けふた男の声

おけふた男の声

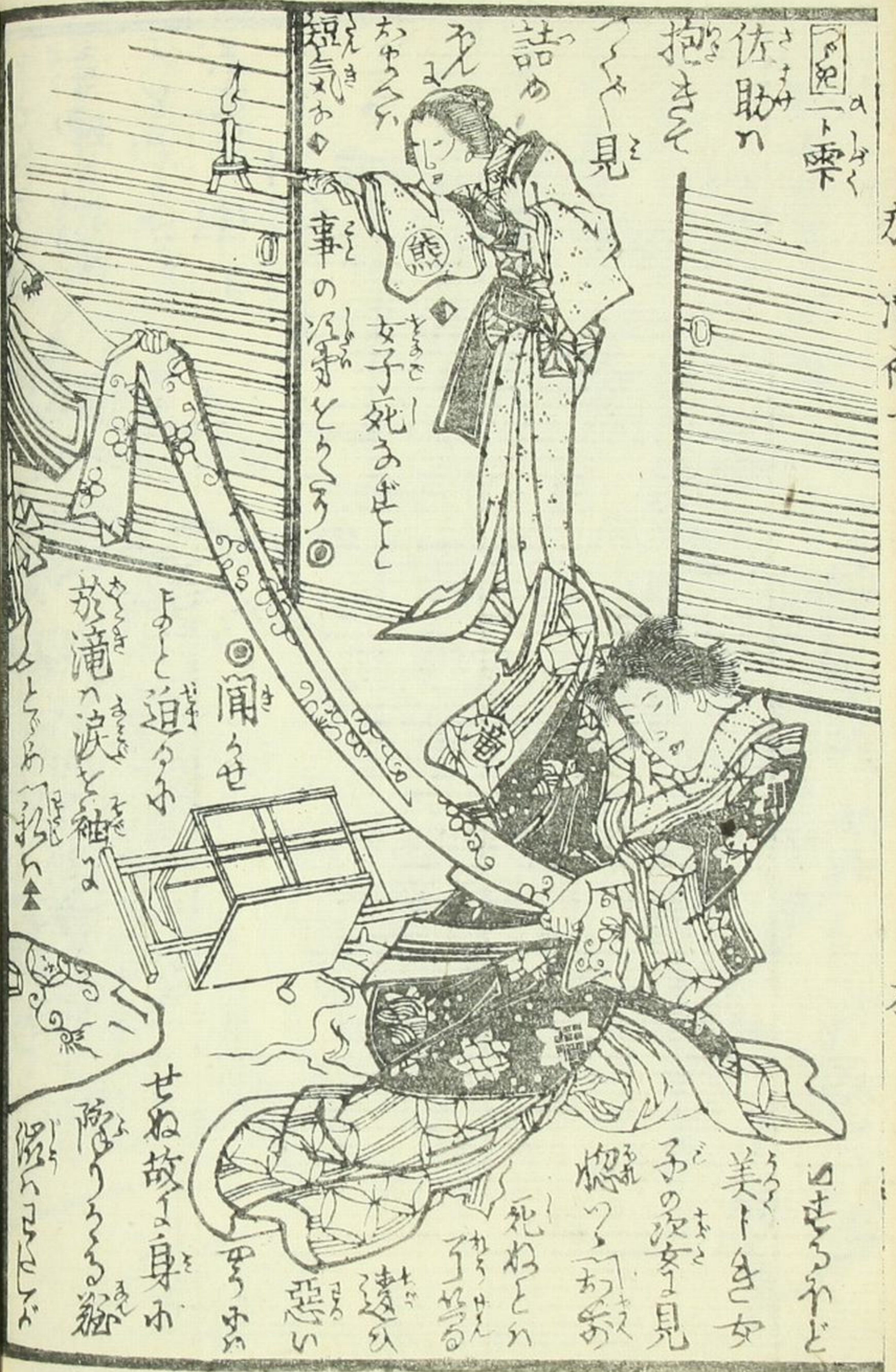
カ 活 糸





嫁よ糸  
 けさたが  
 無く...  
 行きては何事と云て頼る宅もあ  
 寧ろ後を死あんと是悟のあ  
 何卒見のじそ下されとのめを  
 多程甲の連も立て聖天所の  
 天邊羅く占く連も込んそ  
 佐助の於俺のうやをつつぐ  
 入るふ散髪あれど吃驚の口

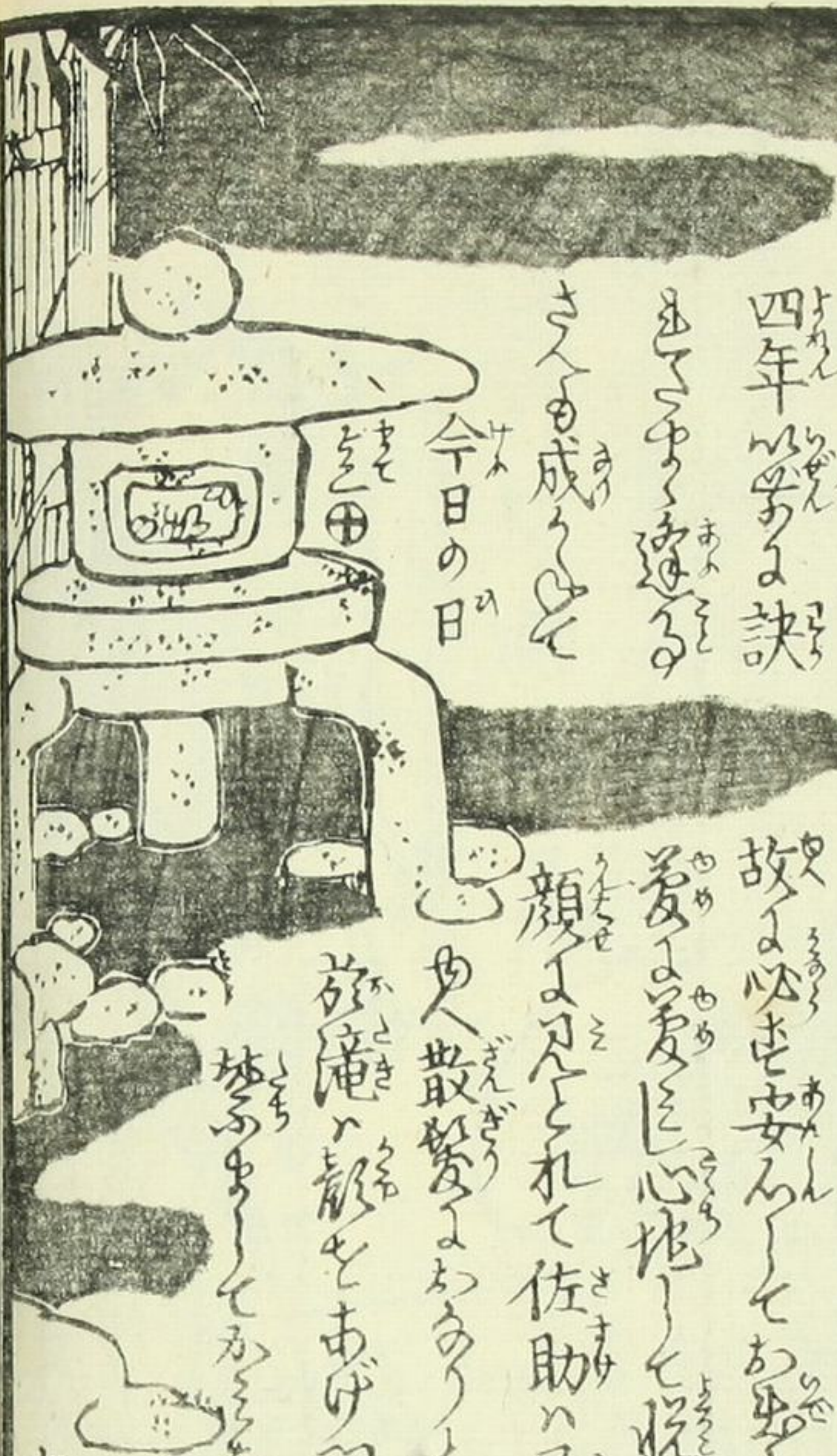
ハシ 竜刀



一ト栗  
 佐助の  
 抱きそ  
 見  
 詰め  
 女子死あせし  
 事の深かどうも

聞き  
 下し迫らふ  
 於滴の涙と袖よ  
 せぬ故の身小  
 際しうらるる  
 引受どの  
 死ねとい  
 子の方を見  
 惚つちあ  
 美しき女  
 日まらふど

つ先下通りを吐き  
 ひと問をそ於庵の此  
 時涙交りの声とあり  
 たておの一個の母よ  
 四年の学は決  
 してゆく遠る  
 さ人も成る心と  
 今日の日  
 於庵は向ひお茶の母はか熊とてやど  
 五十の坂を越むとりの今より於庵は吃驚し  
 夫の母さんといふのを佐助におけし  
 父安を承が事吞友達不替りて宅は居る  
 故は必き安んておとらまを於庵は又  
 愛は愛に心地して悦び勇まをふくは  
 顔は足とれて佐助の居るししがああ  
 一人散髪はあつと於庵は尋ねらる  
 於庵の顔をあげのいおの男を祈  
 地あつてかを切ま子の権現様へ  
 祈願を筆とつと  
 言葉を辨りて



と佐助の耳の中  
 のぞ此雨をさす  
 下  
 谷五  
 條町の  
 我宅へ  
 伴ひける  
 母の



此長吉の  
 事件の  
 二  
 篇小記  
 載せり  
 音信あり  
 佐助の  
 小首をか  
 おけて心算の  
 体とほ

八  
 七  
 六  
 五  
 四  
 三  
 二  
 一

つ  
 母の



ついでに熊は四年ぶりに  
面会し嬉し悦び互に  
手小舞をとりあつて

もの涙  
先づ

彼の佐助の

於滝を意慕ひ

戀母か熊は叱をされが

母のか熊は佐助が我が娘

於滝の色香小迷ひ

意し付入於滝の叱を

されど聞入ぬを程し

説諭をほ終は嬉し

あゝとんる顔し似も

アゝと怒れき生を

つたるれが世帯は苦

あふそと

あふそと

睦はくきと

香具師長

吉ざら

今竜刀下



疾くも於滝の  
事情水も中  
の松戸の旅  
筆屋より松山  
町の春吉の朋友

夜十二時ごろ  
東の雨来と押

或る

夜十二時ごろ

長吉が短

刀は

突へ

然

突

然

然

然

然

然

然

九

於滝と佐助が襟

髪揃んで左右小

引振短刀逆ひく小紋えん  
 既に刺さんととまるゆゑはまり涙と  
 共い声ふるゆゑサテお前  
 私を去り  
 假令佐助さん  
 と夫婦  
 あらやと殺  
 さる殺せ邪見  
 のお前愛怒  
 母の熊此の事既よ扱さんと例を改くあり  
 言をねく長吉も悪切腕もみるもたり此場は  
 居しや  
 けら



長吉お向ひる強く  
 淡判され流  
 るの長吉も其  
 場を  
 立去り  
 後三人  
 忙然と  
 を額

初編明治十年四月十八日御届

定價二錢五厘

編輯人

南植町十二番地 齋藤文吉

出版人

馬喰町四丁目十八番地 小森宗次郎

010190508400

